

Always 「K2P2エッセイ」～クミジョとクミダンのるつぼ～

【第3回】 ある車掌の死

本田 一成 ●武庫川女子大学教授 K2P2共同代表

2025年5月に「文藝春秋ビジネスカンファレンス」（対面・WEBハイブリッド開催）に出演して、基調講演「クミジョ応援係長と考える・労働組合の未来」に臨んだ時の話。開口一番、「若林栄子さん事件」を紹介したところ、視聴者からたくさんのコメントが届いた（全員クミジョ）。もっと詳しく知りたい、どの本を読めばよいのか、と。

筆者は、市販本なら鈴木裕子『私たちの戦後労働運動史』や正木鞆彦『バス車掌の時代』などで読める、と回答しながら、若林さんはどんな気持ちだったのだろう、と考え込んでいた。

1963年6月、神戸交通労組の組合員で、市バス車掌の若林さん（当時25歳）は、勤務後に友人に返すつもりだった500円をポケットに入れたまま、事前申告を忘れていたことを後悔した。案の定、身体検査で発見され、尋問を受けることになった。

長時間に及ぶ拘束と尋問の果てに、いったん帰宅を許された若林さんは、友人宅に向かう、と出かけ、鉄道自死に至った。親族や関係者への遺書が見つかり、父親には、絶対に不正はしていないのにひどい、一足先に失礼します、などと書き残していた。

この悪名高き身体検査は、戦前は現金を扱う産業では横領を防ぐ名目で広く見られ、尾行や監視まで実施していたもので、戦後は廃止された。だが神戸交通局はなぜか死守し、労組は多少の抗議をするのにとどめていた。

厳しすぎる身体検査に憤った婦人部が実施し、286人の女性組合員から回答を得たアンケート調査結果は、壮絶な人権無視とセクハラを伝えている。上衣やスカートを脱がされた、スリッパを脱がされた、ブラジャーの中に手を入れられた、パンティーの上から触られた……。女性車掌はこれらに耐えて勤務しながら抗議を続けた。時に小競り合いから騒動となり婦人部長が処分されたりした。この処分を巡っても、労組には賛否両論があった。若林さんは、冤罪ではなく失恋が原因で自死した、との噂が流れた。

当局はそれでも身体検査を続けていたが、若林さんの死が国会（衆議院法務委員会）で人権侵害問題として取り上げられて世間の注目を集め、労組もようやく腰をあげた。身体検査は1965年に廃止された。

若林さん事件は、人権無視のすさまじさと、労組の無力さがわかる史実である。そのまま、日本の社会ってどうなっているんだろう、労組って何なのだろう、さらには、人間って何だろう、組織って何だろう、という問いになる。

若林さんはなぜ命を絶ったのか。冤罪への抗議の奥に何があったのか。役得のごとく身体検査を続けようとする意思、我慢の強要を放置する意思、犠牲は他人事にしてでも保身する意思など、ハラスメントに満ちた日常から見えた将来（つまり今）に絶望したのではないか。

（続く）